



小学校への架け橋は…

今月の下旬に、天王寺小学校下にある幼稚園や保育園と大江幼稚園の年長さんの園児を招いて、保育園・幼稚園と小学校の連携行事を行います。行事といってもそれほど大層なものではなく、学校を探検しつつ1年生の教室で授業する様子を見学したり、講堂で体育の授業体験をしてもらったりするというものです。

かつては、天王寺小学校は全学年2学級でしたが、ここ数年1年生は3学級が平均となり、来年度の1年生は、100人近くになるなど、毎年新しい子どもが増えています。新入生の中でも上にお兄ちゃんやお姉ちゃんがいる子は、学校行事や地域行事などで学校に来ることも多く、よく知った場所でしょうが、初めて学校に来る子どもにとっては、学校は巨大な未知の場所に思えるのではないのでしょうか。まして、学校では、それまでの園生活と比べていろいろな部分が違います。時間ごとにするのが細かく決められているだけでなく、毎日45分間じっと椅子に座っているわけですから、いくら小学校は勉強をするところだとわかっていても、すべての子どもが適応できるかという、難しいかも知れません。この新入生が学校に適応しづらいという問題は、小一プロブレムと言って、20年以上前から言われています。では、その間学校は変わってきたのかというと、個に応じた指導が強く打ち出されたり、特別支援教育が始まったりと随分子ども一人ひとりに寄り添う教育になったと思いますが、学校自体の大まかな仕組みは変わっていないように思います。そのため、文部科学省も幼児教育と小学校教育をつなぐ、保幼小の架け橋プログラム事業を展開したり、大阪市でも保幼小（認定こども園）小連携・接続推進事業で、研究や研修を行ったりしています。もっとも、ほとんどの子は、一年も経てばすっかり学校に馴染んでいます。それでも、実感として毎年学校に行き渡る子どもが増えているような気がします。そんな中で、学校として何ができるのかなと考えた時、就学前の子どもたちが、学校ではこんなことをするんだという経験をしたり、学校ってこんな場所があるんだということを知ったりすることで、少しでも小学校のイメージを作るきっかけになればと思い、この行事を行うことにしました。また、教室で自分たちの後輩を迎え入れる1年生には、学習している様子を見せることで、この一年間学校生活で身に付けてきたことをあらためて実感する機会にしてくれたらとも思っています。

とは言え、今年初めての取り組みなので、上手くいくかどうかはわかりませんし、効果がどれくらいあるのかもわかりません。とりあえずの第一歩ですが、もし体験後に「もう小学校なんて行きたくない!」と思われちゃったら元も子もないので、やってよかったと思えるように頑張ります。



漢 字 検 定 が 目 指 す も の

先週末、今年度の漢字検定を行いました。天王寺小学校では、毎年学校全体で漢字検定に取り組んでおり、合格率の高い学校にだけ贈られる優秀団体賞を5年連続で受賞しています。漢検は、学校の取り組みなので、漢字が得意な子も苦手な子も、全員が否応なしに受検することになります。基本はその学年で習う漢字が出る級（1年生は10級～6年生は5級）を受検しますが、自分の力に合わせて、級を変更することもできます。子どもたちはというと、しっかりと目標をもって主体的に取り組んでいる子も多く、今年目標に「漢検合格」を挙げる子も結構いますが、一方ではやらされ感満載で、課題がなかなか進まない子もいるようです。

この漢検は、もちろん結果も大事ですが、取り組む姿勢がもっと大事だと思っています。頑張った結果、合格すれば喜びや達成感はひとしおでしょう。しかし、中には、一生懸命練習に取り組んだけれども、どうしても合格できなかった人がいるかも知れません。その時は、悲しいと思うだけでなく、どれだけ悔しい気持ちになるのかが大事です。なぜなら、悲しいという気持ちは、不合格という結果に対してのものですが、悔しいという気持ちはそれまでの努力を含めたものに対してだからです。悲しさから力は湧いてきませんが、悔しさからは次へのエネルギーが生まれます。だから、子どもたちには、残念な結果の時に悔しいと思えるほど頑張っ
てほしいと思っています。そして、漢字検定に限らず、学校で挑戦することはすべてそうしたことに繋がっていることも知って欲しいです。

さて、今年の漢字検定は、結果を待つだけとなりました。結果を見て、子どもたちは、何を思うのでしょうか…。



ウ サ ギ の マ ロ ン

冬休み中に、あるニュース番組で、学校で飼育されているウサギが劣悪な環境で放置されていたことをきっかけに、現在の学校における動物飼育の難しさについて報道していました。

天王寺小学校には、かつてウサギが2羽いたそうですが、現在は雌の「マロン」の1羽のみがいます。いつからいるのだろうと過去のホームページを調べてみたら、今から10年も前に来たことがわかりました。ということは、マロンは、人間だと80歳をゆうに超えたおばあちゃんのウサギになります。それでも、元気に走り回っているのは、毎日の世話をきちんとしているからでしょう。夏の暑い日は空調の効いた部屋で過ごさせて、病気になれば動物病院に連れて行き、休日には教職員が掃除とエサやりに来ています。そうした様子を見ていると、ウサギを可愛がることは



簡単でも、世話をし続けることは難しいなあとあらためて感じます。

一般的に飼うウサギの平均寿命は、7～8年と言われています。今後、マロンがいなくなれば、新しく学校で動物を飼うことは様々な状況を考えると厳しいでしょう。ですから、少しでも長生きしてほしいと願っています。